

前

回まで研究コミュニティの置かれている現状、研究人材の流動性、研究機関・研究者の評価基準などについてアカデミアとビジネスセクタの比較、日米の比較などを織り込んで話題を提供してきました。今回は、

将来を見据えて研究をデザインすることについて考えてみましょう。研究は、その特性や目的論から大きく2つに分類できると思います。必ずしもこれは厳密な定義ではなくあくまでも相対的な差ですが、話のメリハリをつけるために区分しました。

1 つは、目的型研究です。これは研究の目的や目標が具体的で明確で研究成果の評価の良し悪し(使えるかどうか)がすぐに分かるものです。代表的なものは、軍事研究全般、月世界飛行(アポロ)プロジェクトなどです。また製薬・バイオ会社の研究も目的研究の代表例です。製薬会社の研究所などでは、研究・実験の進捗を日報として毎日社長へ報告するほど経営と研究が直接的にリンクしています。成果の是非が判断でき社会や産業へ直接リンクすること、これが目的型研究の最大の特徴です。

それと対極的な研究が発見型研究と呼ばれるものです。発見型研究とは、研究の目的や意義を含めて試行錯誤的にアイデアを創出するものです。MITメディアラボ、XeroxPARCなどの研究所がその代表例だとされています。ここからは、社会的に見ても影響を与える新しいパラダイム変革を誘う研究が生まれてきています。

こ の2つは、それぞれ研究と呼ばれていますが、その成功の要諦をなすポイントはまったく異なります。目的型研究の要諦は、組織としての目的達成意識、組織のプロセス重視、資源の集中投入、マネージメントパワー、客観的・論理的思考能力と評価能力などが挙げられます。それに反して、発見型研究では、個人の自発的・内発的な意思と責任、個人の資質とセンスへの全面依存、資源は分散投資、エンカレジメントに徹する(マネージメントはむしろ阻害要因)、主観的・直感的思考が成功への鍵といえます。特に、発明発見の本質はセレンディップティ(serendipity)であるという指摘もありこれは人知を超えた領域であり、ここに至っては制度的またマネージメント的な方策はほとんど無力だと思います。

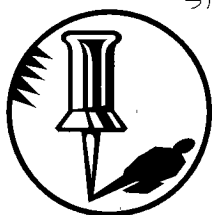
IT産業における研究コミュニティの変容と展望

その6

上林 憲行

し かし、世の中の研究所の多くは、研究の目的や特性に応じてそのマネジメントプロセスや風土を真に理解し研究活動のマネジメントを切り替えてきたかという大いに疑問が残ります。過去の目的研究の成功体験を引きずり両者を混同している場合がほとんどだと思います。特に、日本の企業内研究所は、事業へ密着した目的研究型のマネジメントやカルチャーが歴史的に形成されてきていました。そしてその風土を根底に残したまま、発見型の研究を基礎研究や探索研究という枠組みで始めたわけですが中途半端な結果となりました。これは、研究の特性とマネジメントカルチャーがミスマッチした代表例です。そうした壮大な実験の後、研究の特性に応じて、成功を導くマネジメントカルチャーやコアコンピテンスが決定的に違うという教訓が得られ、その目的に応じて研究をデザインする要諦が明らかになってきました。

世の中では、研究投資の矛先が、目的型研究に10年ぶりに全面的にマクロシフトしてきていますが、今度は、発見型の研究をどのように進めるかということが根こそぎ無視されていることを感じますが、このことが杞憂であることを願っています。



次

回は、独創的な発見型の研究をデザインして成功へ導く歴史が語る原理について述べてみたいと思います。

